〜姉妹都市ウラン・ウデ市訪問記〜

友好を深め貿易の推進を確約

〝留萌と姉妹都市ウラン・ウデ市のより友好の絆を深めよう〟と、ことしで五年目を迎えたソ連ブリヤート自治共和国ウラン・ウデ市に、ことしも二瓶守氏（経済界代表）と石黒邦雄氏（市民代表）がさる八月五日から十二日まで訪問しました。

ウ市の熱烈な歓迎の中で、両氏の見た印象や感想を日記風に掲載してみました。

ウベエフ市長から市役所でウ市の説明を受ける石黒（左）氏と二瓶氏

経済交流をより積極的に

／八月六日　私たちはウ市役所を公式訪問し、いよいよ留萌市代表の大任を果すことになりました。

まず市長室でウベエフ市長や市幹部職員と、再会の喜びと共に固い握手を交わした。

私たちは、原田市長から託された親書をウベエフ市長に、また日ソ協会村上支部長からの親書をソ日協会ソローロフ・ウランウデ支部長に手渡しました。

私たちの今回の訪問の目的は、両市の姉妹都市関係をより深めると共に、経済交流と人的交流にもありました。また、スポーツや芸術などの交流を積極的に行なうとともに経済交流については、ウ市幹部としても積極的に取り組むことを約束していただき、意を強くしたものです。

この後、ウベエフ市長の案内でさっそく市内を見学することになりました。

ウ市は、ソ連邦の十五の自治共和国の一つ、ブリヤート自治共和国の首都ですが、この共和国だけで面積三十五万平方キロメートル（ほぼ日本列島の全面積と同じ）もあり、人口は八十五万人、そのうち三十万人がウ市に住んでいるとのことですが、あまりの広い面積に、私たち日本人には羨しい限りといえます。

市内で目についたのは、随所で建設されているアパート、そして屋内水泳競技場、競馬場の建設（一周千六百メートル、五万人収容の観覧席）など、大規模な工事に驚きながら、ブリヤート・エネルギー休養所と土俗学博物館を訪問しました。エネルギー休養所は、常に医師がおり、患者百人を収容できる施設で、自然環境の整った山中にありました。

私たちが訪れた休養所は、特に心臓、神経系統が主で、三週間程度の休養を必要とする方が入所するところでした。それ以上の場合は、症状に応じてそれぞれの施設があるそうです。

また博物館は、敷地面積三十七ヘクタールあり（将来は五十八ヘクタールにする）この広い敷地内には昔の丸太小屋生活の様子や原始からの生活必需品の陳列、昔の生活と現在の生活の比較など、かなり詳細な資料が陳列されていました。

また、屋外には野獣などを自然と同じ条件で放飼し、現在の人たちに先人の辛酸を知ってもらい、それを後世に引継ぐ計画だということでした。

広いバイカルで学生たちと交流

／八月七日　マクシミハ村に一泊旅行をすることになりました。

この村は、工芸大学の休養所でウ市より二百キロメートル離れて、バイカル湖畔に建設されています。

週休二日制で、この村もにぎわっていましたが、特に、この村に日本人が入村するのは初めてとのことで、私たちは心からの歓迎を受け、感激したものでした。

村の中は、道路など舗装はされていませんが、幅広く改良され、両側には延々と松並木が続いており、鳥の声と緑が目にしみました。

ここでバイカル湖についてふれてみると、広さは三万三千平方キロメートルで、世界最大の湖、世界の湖面積合計の二十五パーセントを占めています。

このバイカル湖に注ぐ大小の河川は三百六十本、出口はアンガラ川一本で、一周二千二百キロメートル、長さ六百五十キロメートル、幅は三十から九十キロメートルで、一番深いところで千七百メートルといわれています。バイカル湖には、この湖にしかいないオオムリという魚が有名です。日本のホッケとよく似た魚で、塩焼、燻製などは、なかなかおいしいものでした。

湖の波打際まで松の密林で、このマクシミハ村では、大学生が思い思いに運動したり、読書、散歩などをのんびりと楽しんでいますが、日本人には羨しいものです。

留萌市民へとアライ熊の剝製が贈られる

案内をしてくれたプローロフ氏は日本にも来たことのある人で、なかなか社交的な方でしたが、学生との交流やバイカル湖の遊覧、ロシヤ風呂と、私たちを歓迎してくれました。

／八月九日　文化大学、テプロプリボール工場幼稚園、家具木材加工コンビナート、テプロプリボール工場を訪問しました。

昨年、留萌を訪れたイネッサ女史（十月地区議長）の案内で、文化大学を訪問、ちょうど夏休みのため学生は不在でしたが、入学受験の真最中でした。試験風景はどこも同じで、どの受験生も真剣。

この文化大学には文教部と図書館の二学部があり、その下に二十一課の専門分野に分れており、徹底した教育が施されているとのことでした。

ウ市には、この他、工芸、農業教育の各大学があり、学生数は二万人をこえるとのことです。

幼稚園は一歳から七歳まで年齢別により保育、幼児教育をしており施設は百をこえており整備され、さすがに男女労働平等の国だと感心しました。

木材コンビナート工場は、すべて流れ作業で原木から剝皮、製材ハネ材はチップ、剝皮は染料にと資源が豊富な国でありながら、物を大切にし、節約していることに私たちも見習う点があると思いました。

明るく育つ幼稚園児たち

マクシミハ休養村の大学生たち

ウラン・ウデ市の広場風景

木材などの貿易を積極的に

／八月十日　美術館　住宅建築コンビナート、鉄橋金属構造物工場を訪問しましたが、この日、経済交流についてブリヤート自治共和国のコーラブレフ第一副首相と会う機会を得ました。

私たちの説明にも心よく応じてくれ、ウ市と姉妹都市である留萌市と、木材等を積極的に輸出することを、国に働きかけることを約束していただきました。

続いて美術館では、革命以降の作品が数多く展示されており、このウ市に立派な美術館があるということは、やはり数多くの芸術家を生んだ国家を感じとることができました。

住宅コンビナートでは、主としてコンクリート組立を生産していました。

一棟八十世帯のアパート建設に要する費用は、約五万二千ルーブル（一ルーブルは約四百円）で、六カ月で完成、煉瓦建のアパートで約七十五万ルーブルで一年間で完成するとのことです。

現在は、ほとんどがコンクリート組立方式を採用していますが、労働力不足で年五から六パーセントの予算を国に返上しているとのことです。

また、鉄橋、金属構造物工場では、従業員の平均年齢は二十二から二十三歳の若者ばかりで、バイカルからアムール鉄道三千五百キロメートルの鉄橋を製作していました。

ここだけの従業員数だけで二千人あまりの若者たちが、一九八一年完成予定の同鉄橋づくりに従事していました。

私たちは、この工場訪問を最後に視察の日程を終りました。

ウベエフ市長から原田市長に返書を託され、また、留萌市にはアライ熊（シベリヤに棲息）の剝製が贈られました。

八月十一日早朝、私たちは多くの人の見送りを受けウ市を離れましたが、今後より両市の友好の絆を深めるとともに、経済交流の伸展を願いながら、私たちは大任を果した喜びを胸に、帰留の途につきました。